

各種ガイドラインおよび 高校英語教科書に見る敬称の問題

石川(中尾)有香*

1. はじめに

特定の人物に呼びかけたり言及したりする場合、英語ではしばしば Mr、Mrs、Miss などの敬称を用いる。このことは中学校のごく初期の段階で指導され、言わば当然とみなされているが、フェミニズムの観点から見た場合、実はここには看過できない問題が潜んでいる。

と言うのも、男性には一貫して Mr が用いられる一方、女性の場合に限り、婚姻状態によって呼称が変化するからである。こうした伝統的英語語法は、女性のアイデンティティが女性自身ではなく、婚姻という社会的契約によって、言い換えればその配偶者によって決定付けられることを暗示するものであり、旧弊な固定観念に基づくものと言わなければならない。

以上のような問題意識をふまえ、現在では女性の敬称として Ms を用いることが増えてきている。Ms は婚姻の状態を問題にしないという点で Mr と相補的關係にあり、女性の側からは Ms の一層の普及が望まれるところである。しかし一方で Mrs/Miss という旧来型の敬称がなお広く用いられていることも事実である。

本稿では、女性敬称に関するこうした新しい動きが、実際の英語圏社会、ならびに教育現場においてどの程度反映されているのかを実証的に調査する。ま

*1985年3月神戸女学院大学文学部英文学科卒業、1987年3月神戸大学大学院教育学研究科英語教育専攻修士課程修了、現在、広島国際大学人間環境学部講師

ず2章では、女性敬称としてのMsの成立の経緯と英語語法におけるその受容について概観する。ついで3章では各種の社会的ガイドラインにおける女性敬称の扱いを検証する。4章では日本の高等学校英語科用教科書における女性敬称の扱いを量的・質的手法で分析する。

2. Msの成立の経緯と英語語法におけるその受容の現状

Msという語の成立は意外に古く、*The Oxford English Dictionary, Second Edition*によれば1952年が初出とされる。またビジネス場面に限って言えば、少なくとも1932年ごろから使われていたという報告もある (Baron, 1986, pp.167-168)。しかしながら、当時のMsの使用はビジネス・レターなどに限定されており、一般的に使用される状況ではなかった。

Msが一般化するきっかけの一つとして、1960年代の米国における雇用差別問題が挙げられる。当時の米国の航空業界では、就業規則によって女性客室乗務員は未婚者に限定されていた。ⁱつまり、結婚によって敬称がMrsになると、女性乗務員は職を追われていったのである (れいのるず, 1996, p.173)。

女性敬称が女性の社会的地位を改善する上で不可避の問題であるという認識は次第に広まり、1970年代に台頭した第二波フェミニズム運動ではMsの使用が積極的に推奨されることとなった。1972年にはMsを表題に掲げた雑誌が創刊され、また、同年に出版された*The American Heritage School Dictionary* (Houghton & Mifflin) では初めて見出し語にMsが収録された。さらに翌1973年には、国連において女性に対する正式な敬称としてMsが採用されている。

Msは1970年代以降、英語語法の中でも受容され、浸透していった。現在では、主要なEFL (English as a Foreign Language) 辞書はすべてMsを見出し語に加えている。また代表的な米語大辞典である*The American Heritage Dictionary of the English Language, Fourth Edition* (2000) においては、“As a courtesy title Ms. serves exactly the same function that Mr. does for men” という解説がなされ、現代の女性敬称としてはMsが標準であることが明確に示されているので

ある。

しかしながら、こうした Ms の標準性が、実際の社会や教育の現場において十分に理解され、浸透しているかどうかは微妙な問題である。以下 3 章と 4 章ではこの問題を実地に検討してゆく。

3. ガイドラインの調査

本章では、先行研究やガイドラインの記述調査を中心に、標準的女性の敬称を考えてゆくこととする。ここで調査対象とするガイドラインは、(1) 行政府によって設置されたガイドライン、(2) 出版・ビジネス界関係者によって作成されたガイドライン、(3) 教育界関係者によって設けられたガイドラインの 3 種である。以下これらの記述を順に見てゆくこととしたい。

3. 1 行政府のガイドライン

Honolulu County Committee on the Status of Women によって制定された *Do's and Don'ts for Non-Sexist Language* (1988) には、両性に平等な敬称使用方法と姓名表記方法が詳しく規定されている。ここでは、“When Mr. is used, Ms. is the equivalent. Use Ms. to designate both a married and unmarried woman.” (p.1) とされ、男性に Mr を使用するならば、女性には Ms を使用することが推奨されている。また、Ms は既婚・未婚の両者に区別なく使用する敬称であると定義付けられており、Ms と Mr が性的に平等 (gender-fair) であるとされていることが確認できる。さらに、このガイドラインでは、“Miss Lee, Ms. Chai and Mrs. Feeney” といった用例には “Don't” の印をつけて、女性を Miss/Mrs/Ms で区別すること自体を禁止事項としている。すなわちここでは Ms 使用の前提として、これまでの Miss/Mrs の廃止を求めているのである。

こうした方針は、Mr と対等な意味合いを Ms が保持してゆく上で、重要な方策と考えられる。と言うのも、Miss/Mrs による従来 of 2 分法の上に Ms の使用が加わった場合、若い未婚女性には Miss が、既婚女性には Mrs が、そして

離婚した女性や、未婚のまま出産をしたり、中年を超えたりした女性などには Ms が使用されてゆくという、敬称使用法における新たな差別的区分法出現の可能性が否定できないからである。

Honolulu ガイドラインの実際の記述を下に示す。表の左側が Don'ts とされる禁止事項である。

Names and Titles

Don'ts	Do's
Miss Lee, Ms. Chai and Mrs. Feeney	⇒ Ms. Lee, Ms. Chai and Ms. Feeney or Lee, Chai and Feeney.
Governor Burns and Anna Kahanamoku	⇒ Governor Burns and Representative Kahanamoku.
Mr. and Mrs. John Tanaka	⇒ Ellen and John Tanaka (if both names are known), or (if the name of spouse is not known) Ellen Tanaka and spouse.

(p. 1)

上記に見るように、同書は、男性のみをフル・ネームで表したり女性の敬称のみを省略したりすることも禁じている。妻と夫に関しても Mr. and Mrs. John Tanaka などと、男性の名前のみを記すのではなく、名前が分かっている場合には、両性とも平等に名前を表記し、敬称を省略することを良しとする。こうした敬称回避という近年の傾向については、下で再び考えてゆくこととしたい。

3. 2 出版・ビジネス界のガイドライン

ビジネス・レターにおける敬称の誤用は円滑な業務遂行の妨げになりかねないので、敬称使用の指針の必要性はフェミニズム言語改革以前から、ビジネス関係者の間で高まっていた。これまでに出版された多くのビジネス文書作成のためのガイドラインが Miss/Mrs/Ms の問題を取り上げている。

Frank & Treichler (1989) はそうしたガイドラインの調査を行い、“Hand-

books that include sections on business letters usually cite *Ms.* as an appropriate form to use in addressing a woman” (p.101) と述べて、ビジネス文書では、*Ms* の使用が適切であると結論付けている。また同書は、McMahan and Day (1986) が *Miss* や *Mrs* の選択的使用は認めず、*Ms* のみの使用を求めていることを紹介している (p.102)。

Schwartz (1995) も基本的には、Frank & Treichler (1989) の主張に同意している。彼女も “Most guidelines for nonsexist usage urge writers to avoid gratuitous references to the marital status of women, including the courtesy titles *Miss* and *Mrs.*” (p.31) としており、多くのガイドラインにおいて、*Miss* や *Mrs* といった敬称の使用回避が唱えられているとする。

しかし一方で、学術書などでは、敬称をつけずにフル・ネームまたはラスト・ネームのみを使用することが多いとも述べている。また、例えば、20世紀初頭に活躍した Emma Goldman や19世紀に生きた Lola Montez など、特に第二波フェミニズム台頭以前の人物に対して *Ms* が使用されて、*Ms. Emma Goldman* や *Ms. Lola Montez* とされた場合には、“anachronistic or ironic” と感じさせる場合さえあると、*Ms* の安易な使用に対しては注意を促している。

Most guidelines for nonsexist usage urge writers to avoid gratuitous references to the marital status of women, including the courtesy titles *Miss* and *Mrs.* Scholars normally refer to individuals solely by their full or their last names, omitting courtesy titles, even those that do not identify marital status—*Mr.* is usually superfluous and *Ms.* may seem anachronistic or ironic if used for a woman who lived prior to the second U.S. feminist movement of the 1960s (*Ms. Emma Goldman, Ms. Lola Montez*).

(Schwartz, 1995, p.31)

敬称の使用回避という点からガイドラインを眺めてみると、ニュース記事に

において姓名を表記する場合に、敬称を付けないでおくということを決めているガイドラインも多い。例えば、*The Associated Press Stylebook and Briefing on Media Law* (2000) では、直接引用で用いる以外は、Mr および Ms/Miss/Mrs の敬称を使用せずに、フル・ネームで姓名を表記することが決められている。

Refer to both men and women by first and last name: *Susan Smith* or *Robert Smith*. Do not use the courtesy titles *Mr.*, *Miss*, *Ms.* or *Mrs.* except in direct quotations, or where needed to distinguish among people of the same last name (as in married coupled or brothers and sisters), (p.62)

ところで、ニュース記事における Ms の使用に関しては、1984年に大きな転機が訪れたとされている。Frank & Treichler (1989, pp.130-131) によると、保守的でフェミニズム言語改革にも異を唱えていた新聞として知られている *New York Times* が、Ms の普及に押され、同年ついに Ms の使用を受け入れたという。それまで同社は Ms の使用を一切拒否し、いくら抗議を行おうとも、本人の希望や主張は一切聞き入れずに Miss や Mrs を一方的に押し付けていたのである。

このように、Ms の受け入れが進んできている一方で、敬称そのものを回避しようとする動きも見られることが分かった。次節では教育関係のガイドラインを見てみたい。

3. 3 教育関係のガイドライン

まず、*East Central Curriculum Management Center in Illinois* (1979) を見ておこう。このガイドラインは、当時の米国保健福祉厚生省 (U. S. Department of Health, Education, and Welfare) の承認を得て、R. S. Douglass を代表者としたプロジェクトチームが、男女平等教育を目指して作成したものである。な

お、米国保健福祉厚生省は、1980年より、米国教育省（U. S. Department of Education）に再編成されている。

ここでは、敬称にまつわる婚姻情報の表現についての注意書きが記載されているのだが、下に示すように、Miss/Mrs といった敬称を使用することで女性の婚姻状態を不必要に記すことがはっきりと禁止されている。

...the following should be avoided:

* Stating a woman's marital status when it is irrelevant and when the same information about the man is not available (e.g., Mr. Clark and Mrs. Brown were co-workers) (p. 4)

Ms/Miss/Mrs のいずれを使用すべきかといった女性の敬称をめぐる問題のいくつかは、上記の記述が示すように、男性の敬称使用との比較を行った場合にある程度の解決方法を得ることが可能となる。例えば、男性の婚姻状態を表す必要のない場合には、女性の婚姻状態も表す必要がない。そうした場合には Miss や Mrs ではなく、Ms を使用すればよいということになる。

特に、人間教育に関わる学校現場においては、両性を平等に扱う習慣の育成が肝要となる。同じコンテキストにおいて男性には Mr を使用しながら、女性を Mrs と Miss で区分するという不均衡な言語使用は、学習者に性差別意識の芽を植えつける危険性を孕んでいる。

本章の最後に、米国大手教科書出版会社の一つである McGraw-Hill 社が出版している *Guidelines for Equal Treatment of the Sexes in McGraw-Hill Book Company Publications* (1974) を見ておこう。同ガイドラインは一企業の社内指針ではあるが、教育界・一般社会に大きな影響を及ぼし、国会審議でも言及されるほどであったとされるものである（れいのるず, 1993, p. 50）。

ここでは、“The language used to designate and describe females and males should treat the sexes equally.” (p. 9) とされ、“Ms. King and Mr. Riggs” とい

う用例を挙げて、敬称も両性にバランスよく Mr と Ms を使用することが推奨されている。しかし、使用に際しては本人の好みを優先することにも触れており、敬称使用法の問題の複雑さが覗える記述となっている。

敬称を用いない場合の姓名表記方法についても記載がある。例えば、下表の左側に示されている両性でバランスの取れていない表記は、表の右側に見るように、両性共に姓のみ、または名のみ表記を行うなど、バランスのよい表現に言い換えることが要求されている。

McGraw-Hill の姓名表記ガイドライン

<u>no</u>	<u>yes</u>
Bobby Riggs and Billie Jean	Bobby Riggs and Billie Jean King
Billie Jean and Riggs	Billie Jean and Bobby King and Riggs
Mrs. King and Riggs	Ms. King (because she prefers Ms.) and Mr. Riggs

(p. 10)

こうした具体的な用例表示の後で、同書は、女性の姓名表記にまつわる婚姻情報の問題についても取り上げている。ここでも、女性の婚姻状態を不必要に記すことは避けるように命じている。

Unnecessary reference to or emphasis on a woman's marital status should be avoided. Whether married or not, a woman may be referred to by the name by which she chooses to be known, whether her name is her original name or her married name. (p. 10)

以上、本章において、行政府関係、出版・ビジネス関係、教育関係におけるガイドラインの記述を見てきた。文書ガイドラインにおいては、両性に平等なことばの記述という観点から、女性に敬称を用いる場合には Ms の使用が推奨されていることが明らかになった。では、こうした指針は、我が国の英語科教

科書にも反映されているのだろうか。次章では高等学校英語科用教科書の調査を行う。

4. 教科書の調査

4. 1 調査目的

平成12年度に使用された高等学校英語科用教科書の『英語 I』は、全種で48冊に上る。練習問題および速読用テキストを含めた場合、これらの教科書に使用された英語の総語数は約34万語となる。本調査では、『英語 I』に使用された34万語における Ms、Miss、Mrs の3つの敬称の使用頻度および使用状況を比較してみたい。

4. 2 調査方法

『英語 I』の48種の教科書を対象とし、その中に記載された Ms/Miss/Mrs の3つの敬称をすべて拾い出すこととする。本調査では、Ms と Ms. または Mrs と Mrs. など、ピリオドの有無による区別は設けず、同一の語として処理を行う。その上で、“Ms. Spanos” や “Ms Higgins” など、それぞれの敬称に人物の姓名を表す固有名詞が後続する場合のみを調査対象として、その出現頻度を数えてみることにした。従って、“Miss!” などの呼びかけにおいて、単独で使用された敬称は、本調査では、調査の対象としない。また、“Miss America” など、敬称の後に地名が続く場合も、調査対象から除いているが、“Miss P.” や “Mrs. C.” など用いられているイニシャルは姓名を表していると解釈し、調査対象に加えている。

ところで姓名表記には、当事者に対する「呼びかけ」としての機能を果たす場合と、当事者不在の「参照指示」の機能を果たす場合があることが、服部(1997)によって指摘されている。しかし本調査においては、こうした機能の違いは問題としない。

4. 3 結果と考察

上記の条件下で使用されている Ms/Miss/Mrs の用例を本論文末に別表として添付する。用例の後に記載されている数字は使用頻度を示している。以下、これらの調査結果を使用頻度と使用状況といった2つの観点から分析してゆきたい。

4. 3. 1 頻度調査

『英語 I』で使用されているそれぞれの敬称を検索した結果、Ms は65回、Miss は30回、Mrs は153回出現していることがわかった。ⁱⁱ 結果を表 1 に示す。

表 1 教科書に見られる女性の敬称：型による出現頻度と出現率

	Ms	Miss	Mrs	女性の敬称使用合計
頻度数	65	30	153	248回
出現率	26.2	12.1	61.7	100.0%

上表の結果から、我が国の教科書において、女性の婚姻状態を表した Miss と Mrs が使用される割合は、Ms/Miss/Mrs の3つの敬称の総出現頻度数の約3/4を占めていることが分かる。その中でも、妻や家庭を持つ女性を強調する Mrs は、3つの敬称の総頻度数の6割を超えている。下記の図 1 で確認しておきたい。

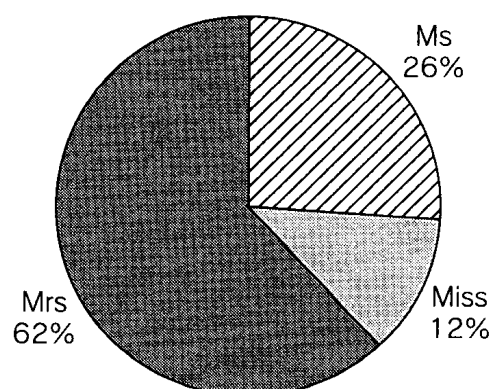


図 1 女性に使用する3つの型の敬称の出現率

前章で見た McGraw-Hill のガイドラインでは、“Unnecessary reference to or emphasis on a woman’s marital status should be avoided” とされていた。ところが図 1 で見たように、我が国の教科書では、調査対象の3/4にあたる女性が婚姻状態に言及されているのである。これらが不必要な情報であるならば、性差別的表現であると考えられる。

しかし仮に、Miss/Mrs といった婚姻情報が必要であったとしてみよう。今度は逆に、『英語 I』の中に現れる女性の75%が婚姻状態を示さなければならぬようなコンテキストの中で描写されたのだということになり、こうした題材の選択が性差別的であると考えられる。どちらにしても、我が国の教科書では、女性の敬称に関してかなり偏った使用がなされていると言えるのである。

4. 3. 2 使用状況調査

フェミニズム言語改革以降、さまざまなガイドラインにおいてその使用が奨励されている Ms ではあるが、我が国の教科書における Ms の使用頻度は、Miss より高くなってはいるものの、Mrs の半分以下でしかないことが分かった。ここで、Ms/Miss/Mrs がどのように使用されているのかをさらに詳しく調べるために、それぞれの敬称を冠した姓名の種類数を見ておくこととしたい。

ところで高等学校英語科用教科書では、学習者に英語学習を身近なものと感じてもらえるように、題材に工夫を凝らしているものが多い。例えば、典型的な我が国の学習者をなぞった人物を設定し、その人物たちが住人となる擬似世界を想定しているものは定番ともなっている。そこで主人公は高校へ通い、友達と遊び、英語学習を進めてゆくといった物語構成をとる。このような教科書の中の世界で、英語の先生または担任の先生に女性が設定されている場合には、その人の姓名に敬称を冠して表記する頻度は必然的に高くなる。表 1 に見る様に、「出現頻度」においては26%と、Miss よりも15%近く高い数値を記録している Ms ではあるが、後続する姓名を眺めてみると、異なる要素が見えてくる。敬称と共に使用された姓名の種類数という点においては、Ms が3つの

敬称の中で最も低いことが判明したのである。

Ms を使用している表記で、最も頻度が高かった Ms. Spanos は26回に上る。これは、ある特定の教科書の英語教師の名前となっているためである。2番目に多い Ms Ito も同様に、教科書世界における教師となっている。そこで、Ms/Miss/Mrs のそれぞれを冠した姓名の種類数を数値で見ると、下の表2に見るように、順に12、13、47となっている。そこで、3つの敬称が広く一般的に使用されているものかどうかを知るために、延べ頻度数を出現種類数で割った割合 (Type/Token Ratio) を求めてみた。この数値は表2の最後の行に示す。数値が小さい場合は、その敬称が、多数の教科書で使用されていたり、多様な人物に使用されていたりすることを示唆する。一方、数値が高い場合には、一つの敬称がある特定の人物と結びついて使用されている度合いが強いということを示す。

表2 教科書に見られる女性の敬称使用法：出現頻度と出現種類の割合

敬称	Ms	Miss	Mrs	合計／平均
種類数 (token)	12	13	47	72
頻度数 (type)	65	30	153	248
頻度／種類	5.42	2.31	3.26	3.44

上表からは、最も出現頻度が低い Miss が、実は最も多くの種類の姓名と組み合わせられていることが分かる。特定の人物への使用に限定されることなく、さまざまな人物に適用されていると言える。一方、Ms は、特定の人物と組み合わせられて現れていた割合が最も高く、Miss の約2倍となっている。Ms が使用される状況は限定されているのである。

ところで、頻度／種類の割合においては Ms と Miss の中間値を示した Mrs であるが、この語はもともと153という極度に高い頻度数を示しており、さらに組み合わせられた姓名の種類も47種と、他の2つの敬称と比べて数が非常に多くなっている。では次に、この Mrs に注目し、Mrs を冠せられた女性の既婚

情報提示が適切であったかどうかを中心に、その使用状況を見てみることにしたい。

まず、既婚者であるという情報を提供する状況として、1組の妻と夫を表記する場合が考えられる。男性を示す敬称と共に姓名に前置する用法は、延べ7回の使用であった。いずれの場合にも、両性の敬称は並列使用されている。MrとMrsを並列表記して夫妻の姓に冠する用法は、3種類見られ、出現頻度合計は5回となっていた。夫にDr.[Dr]の敬称が用いられたものが1種類あり、2回出現している。

Mr. and Mrs. Nakamura (3)

Mr. and Mrs. Huxtable (1)

Mr. and Mrs. Brown (1)

Dr and Mrs. King (2) ()内の数字は、それぞれの用法の出現頻度数

一方、Msの使用例の中には、このように男性を示す敬称と併記する用法は見られなかった。1組の夫婦であることを示す場合には、教科書においては、婚姻情報を持つMrsを敬称として選択していると言える。もっとも、約1億語を有するBritish National Corpusを調査したところ、2例という少数例ながら、Mr and Msというコロケーションも見ることができた。両性に平等な言葉使いを目指すのであれば、教科書の中においても、今後、Mr and MsまたはMs and Mrという表現を思い切って採用していてもよいのではないだろうか。

ところで上記の使用例では、両性の敬称がMr. and Mrs.またはDr. and Mrs.とされており、いずれの場合も、男性を前置するという男性優先の問題があるが、男女の記載順序については石川(2001)で詳しく述べているので、本稿では触れない。

さて、夫婦を表すために使用されたMrsは7回の出現に止まっていたことが判明した。その他のMrsの使用箇所を見てみると、既婚情報の提供が不必

要であったと思われる箇所も散見される。

例えば、ある教科書では、町議会での役員の話し合いの描写において、Mr と Mrs が使用されている。議題は、公園の閉門時間を延長するべきかどうかという問題となっているのだが、登場する女性の町議会議員には、全員、Mrs が使用されているのである。もちろんここで、女性の婚姻情報を提示する必要性がないということは言うまでもない。むしろ問題となるのは、学習者が Mr と対等に議論を行える女性の敬称が Mrs であると誤解したり、さらには、既婚者であることが「標準」であり、両性ともに町議会議員となるためには、結婚することが必要条件であるかのような固定観念を抱いたりしてしまうことであろう。Mr に対応する語としては、むしろ、Ms の使用こそが相応しいと言えるのである。

また別の教科書では、英語のジョークと共に、動物の鳴き声のオノマトペが英語と日本語で異なることを紹介している。学習者の「言葉や文化に対する関心を高め」ⁱⁱⁱ てくれる優れた題材を採用しているのだが、該当の課では、ミヤオさんという女性を Mrs. Miyao と記述して既婚者であるという情報を与えている。ここでの内容は、日本語の Miyao が英語のオノマトペである meow に聞き間違えられるというジョークであり、女性が既婚であるのか未婚であるのかは全く無関係な情報である。

さらに本論末に添付した別表を眺めてみると、Anne Sullivan が Miss や Mrs の敬称を伴って出現していることが分かる。彼女の若さを強調したり家庭人としての一面を強調したりする文脈で Miss/Mrs の使い分けがなされた可能性も否定できないが、既婚であるか未婚であるかは、彼女が成し遂げた偉業の評価に関わるものではない。英語科教育においては、両性を平等に扱うという「公正な判断力を養い豊かな心情を育てる」^{iv} ためにも、不必要な婚姻情報を持たない Ms の使用が求められよう。

もちろん、こうした女性の敬称に対して詳しい解説を加え、ことばの使用方法や文化について学習者の関心を高める工夫を凝らしている教科書も出版され

てきている。これらフェミニズム言語改革に積極的に取り組んでいる教科書の中から、ここでは、*English Now I*（開隆堂）を見ておきたい。第11課において、“Sexism in English”というタイトルの下、Miss/Mrs/Msの敬称の問題を取り上げている。

Men keep the title “Mr.” all through their lives. Women change from “Miss” to “Mrs.” after their marriage. Why do only women have to make such a change? Many women think this is sexism in language. Now, however, women can use “Ms.” all through their lives, just as men use “Mr.”.

こうしたことばの問題に関する学習は、他の課における女性の敬称がMsに統一されることによって、一層、深まることとなるであろう。

5. おわりに

Bella Abzugとその支持者が、MissとMrsを廃止してMsを使用するべきであるという法案を米国国会に提出してから、30年が経つ。今日では、様々な場面でMsが使用されてきている。第2章で見たように、行政府・メディア・教科書出版社などのガイドラインの多くは、Miss/Mrsの区別を廃止しMrとMsをgender-fair（両性に平等）に使用することを規定している。Oxford Campus Support Serviceという英語教師向けのサービスも、現在では、Dr/Prof/Mr/Msのどれかを選択するようになっている。

ところが本稿において我が国の高校英語教科書を調査したところ、女性の敬称の使用頻度に著しい偏りが見られることが明らかとなった。さらに、 unnecessaryな女性の婚姻状態を示す敬称が繰り返し記載されている状況も確認された。教科書編集において、女性の敬称の使用にはあまり注意が払われておらず、いまだ、gender-fairな記述がなされていないと言えそうである。

一方で、敬称の性差別性の問題を題材として取り上げる教科書が出版され始めていることも紹介した。今後の教科書の改編時には、敬称の用法にまで、細やかな配慮が払われることを期待するものである。

Lakoff (1975) は、フェミニズム言語改革運動が、Miss/Mrs に代えて Ms の使用を広めようとしたことに対して、社会の変化が伴わなければ、この試みは失敗するとしている。

Until society changes so that the distinction between married and unmarried women is as unimportant in terms of their social position as that between married and unmarried men, the attempt in all probability cannot succeed. Like the attempt to substitute any euphemism for an uncomfortable word, the attempt to do away with Miss and Mrs, is doomed to failure if it is not accompanied by a change in society's attitude to what the titles describe. (p. 42)

Lakoff の指摘を待つまでもなく、Miss/Mrs/Ms の文字通りの意味ではなく、こうした敬称が持つ社会的意味がそれらの使用状況に大きな影響を与えていることは疑う余地もない。Ms に「離婚経験者」や「非婚主義者」さらには「Miss と呼ぶには年をとりすぎた独身女性」といった否定的な社会的意味が加わった場合には、石川 (2003) で取り上げたように、あえて Miss/Mrs を使用することを希望する人がいることも事実である。

最後に、Victoria 州の Ministry of Education による *Guidelines for a Gender-inclusive Curriculum* (1990) の記述を見ておきたい。ここでは、“Language is a guide to social reality. The so-called ‘real world’ is, to a large extent, unconsciously built upon the language habits of the group” (p. 11) と記されている。ことばは社会の変革を伴って変化するという一面もあるが、ことばの変革には、社会の変化を促すという側面があることを我々教育者は常に心に留めてお

各種ガイドラインおよび高校英語教科書に見る敬称の問題

くべきであろう。

別表 高校英語科教科書に見る女性に敬称の使用状況

Miss		Ms		Mrs					
White	8	Spanos	26	Brown	24	D	3	Taft	2
Tennant	6	Sato	15	Smith	17	Luella Bates Washington Jones.	3	Anne Sullivan.	1
Wilson	4	Ito	5	Holt	8	McKee	3	Clair Huxtable,	1
Higgins	2	Shimizu	4	Ball	6	Miyao	3	Claudia Beaufreere.	1
Sullivan	2	Hill	3	Bradley	6	Nakamura	3	Coretta Scott King	1
Tamura	1	Roland	2	Hattori	6	Parks	3	Green	1
Jerusha Abbott	1	Robbins	2	King	5	Rosa Sandoval	3	Hopkins	1
Emma Wilson	1	Pearce	2	Peterson	5	Wood	3	Huxtable	1
Carol Haney	1	Ishiyama	2	Sandoval	5	Amos	2	Kato	1
MacLaine	1	Dean	2	E	4	B	2	McGregor	1
Brown	1	Linda Smith	1	Lee	4	Jones	2	P	1
Harriet Porter	1	Pam	1	Swanson	4	Lippett.	2	Rabbit	1
Green	1			White	4	March	2	Rosa Parks	1
				Crawford	3	Rudolph	2	Tweedlebam	1
								Yamamoto	1

注

- ⁱ 米国労働省 (DOL) によって編集・出版されている職業案内である *Occupational Outlook Handbook (OOH)* の1949年度版を見てみると、airplane hostess の就業資格は、“single women (or widowed or divorced women without children)” とされ、また、勤続の条件として、“their remaining unmarried” が挙げられている (Pilot, 1999)。
- ⁱⁱ 男性を表す Mr の表現頻度は、360回となっており、Ms/Miss/Mrs の3つの敬称を合わせたものよりも43.4%多くなっている。
- ⁱⁱⁱ 文部省 (編) (1999). 『高等学校学習指導要領』 (p. 383)
- ^{iv} 文部省 (編) (1999). 『高等学校学習指導要領』 (p. 383)

参考文献

Baron, D. (1986). *Grammar and gender*. New Haven: Yale University Press.

- Frank, F. W., & Treichler, P. A. (1989). *Language, gender and professional writing: Theoretical approaches and guidelines for nonsexist usage*. New York: Modern Language Association of America.
- 服部幹雄 (1997). 「英語呼称に見る性差の現状：女は last name では呼べないか」『言語文化学会論集』 9, 77-85.
- 石川有香 (2001). 「新聞英語に見る woman と man の語順について：フェミニズムの観点からの調査」『言語文化学会論集』 17, 109-116.
- 石川有香 (2002). 「アメリカフェミニズム運動と言語改革」『言語文化学会論集』 19, 139-152.
- 石川有香 (2003). 「フェミニズム言語改革と女性の敬称の問題：辞書記述の調査を中心に」『言語文化学会論集』 21, 93-107.
- Lakoff, R. (1975). *Language and woman's place*. New York: Harper and Row.
- McMahan, E., & Day, S. (1986). *The writer's handbook* (2nd ed.). New York: McGraw-Hill.
- Pilot, M. J. (1999, May). Occupational outlook handbook: A review of 50 years of change. *Monthly Labor Review*, 8-26. Retrieved November 14, 2002, from <http://www.bls.gov/opub/mlr/1999/05/art2abs.htm>.
- れいのるず秋葉かつえ (編). (1993). 『おんなと日本語』 東京：有信堂高文社.
- れいのるず秋葉かつえ (1996). 「言語変革と社会変革：アメリカの場合」上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会 (編), 『きっと変えられる性差別語：私たちのガイドライン』 (pp.161-191). 東京：三省堂.
- Schwartz, M. & the Task Force on Bias-Free Language of the Association of American University Presses. (1995). *Guidelines for bias-free writing*. Bloomington, IN: Indiana University Press.

Summary

Courtesy Titles for Women Seen in Guidelines and High School Textbooks

Yuka Nakao Ishikawa

The feminist movement, dating back to the 1970s, is often regarded as a social campaign aimed at achieving the equal treatment of men and women. However, it can also be viewed as a linguistic campaign to secure equality between the sexes. The influence of the feminist movement on the English language is observed in its recent usage trends: the avoidance of the pseudo-generic MAN and HE, or the preference of MS over MISS and MRS, which unnecessarily reveal a woman's marital status.

There exist various kinds of expressions that are currently criticised as being sexist; however, in this paper, we will limit our discussion to courtesy titles for women. In Ishikawa (2003), we summarised antecedent studies on women's titles and surveyed the usage explanations of MS, MISS and MRS as provided in some English-English dictionaries for EFL learners. All the dictionaries we examined had already entered MS as a headword.

The purpose of this paper is to investigate how women's courtesy titles are treated in society and education. Firstly, we will overview the problem of traditional courtesy titles of MISS and MRS in Chapter 1, and have a brief look at the history of a new courtesy title of MS in Chapter 2. In Chapter 3, our focus is to be put on several kinds of usage handbooks for non-sexist language, most of which are written for educational and academic purposes. Then, in Chapter 4, we will examine the women's courtesy titles seen in the high school English textbooks used in Japan. Our attention will be oriented to the frequencies of the three courtesy titles as well as to the context in which they are used.